

4 イモッペ川流域の遺跡群についてー 4年間の調査の総括ー

平成12～15年度、鶴川町の米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡が調査された。これらの遺跡はイモッペ川両岸にあり、地番や調査行程の都合により分かれて掲載されているが、調査結果からも明らかなように一つの遺跡群を形成する。ここでは主に遺構と土器の分布を手がかりとして、イモッペ川流域の遺跡群の形成について考察し、4年間の調査を総括する。以下、時期の順に述べる。

縄文時代早期

宮戸3遺跡で、前半の貝殻条痕文土器群に属するムシリ1式(1)が出土した。すべて同一個体の破片である。出土地点は北側の縁辺部なので、分布が調査範囲外の低位部分へ広がる可能性がある。

後半の時期は、遺跡群全体で多数の遺構・遺物が確認されている。特に焼土は121か所検出されており、その大半が早期後半～前期前半の所産と考えられる。宮戸4遺跡斜面部分で検出された住居跡H-1(コッタロ式期)、焼土F-22・23、フレイク・チップ集中FC-1(中茶路式期)からは炭化したクルミ・ドングリが出土している。東釧路Ⅱ式(2)は米原4遺跡、宮戸4遺跡斜面部分でごく少数出土しており、この段階では活動の痕跡は希薄である。しかし、次の東釧路Ⅲ式以降の段階では、遺跡群全体に展開する。東釧路Ⅲ式(3～5)とコッタロ式(6・7)は器形や施文などに類似する点が多く、漸移的に変化する一群を形成すると推測される。同様にコッタロ式から中茶路式(8～10)、そして次の東釧路Ⅳ式(11・12)への移行も漸移的であったと考えられ、貼付帯などに中間的な特徴を示すものが出土している。分布の濃淡を比較すると、東釧路Ⅲ式の要素が強い一群は、南側の米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸4遺跡斜面・町道部分に多く、コッタロ式の要素が強い一群は、北側の宮戸3遺跡、宮戸4遺跡樹林部分に多い。中茶路式・東釧路Ⅳ式は個体数が非常に少なくなり、特に米原4遺跡ではいずれも破片数点が得られているだけである。分布は、中茶路式が宮戸4遺跡水田・町道部分および樹林部分のイモッペ川旧河道に近い低位部分、東釧路Ⅳ式は宮戸3遺跡の台地上、宮戸4遺跡斜面部分にややまとまりが見られる。宮戸4遺跡出土の石器等にも早期後半に特有な組成が見られ、Ⅷ章第3節に福井による考察がある。

表Ⅷ－4 遺跡別遺構数一覧

	住居跡	土坑	Tピット	土器片 囲い炉	石囲い炉	焼土	フレイク・ チップ集中	礫集中	合計
米原3	2	1				12			15
米原4	5	8	9		1	48		2	73
宮戸3			32			2			34
宮戸4	1		57	1		59	1	4	123
合計	8	9	98	1	1	121	1	6	245

表Ⅷ－5 遺跡別土器出土点数一覧

	I a	I b	II a	II b	III a	III b	IV a	IV b	IV c	V c	VI	VII	不明	合計
米原3		1460	20	721	545	2579	510			119	21		8	5983
米原4		3764	4282	551	91	11414	554	4		85			573	21322
宮戸3	32	1798	320											2150
宮戸4		26150	8273	171	250	3554	4230		1	53	1	99	693	43475
合計	32	33172	12895	1443	886	17547	5294	4	1	257	22	99	1274	72930

表Ⅷ－6 遺跡別石器等出土点数一覧

	剥片石器類	剥片・石核類	磨製石器類	礫石器類	礫・礫片	土製品	石製品	合計
米原3	211	3090	260	433	1468	1		5463
米原4	1489	12610	2644	749	21388	11		38891
宮戸3	74	258	17	50	734			1133
宮戸4	2273	27429	702	457	20890	20	5	51776
合計	4047	43387	3623	1689	44480	32	5	97263

縄文時代前期

前半の時期は、早期後半に引き続き多くの焼土が形成される。宮戸4遺跡S地点では、沢地形の内部に被熱した礫・礫片を主体とする礫集中が3か所見られ、周辺の焼土とともに調理などの際の熱処理に関連するものと推測される。縄文丸底・尖底の土器群に属する綱文式（13・14）や静内中野式が遺跡群全体より出土している。宮戸3遺跡、宮戸4遺跡では綱文式、米原3遺跡、米原4遺跡では静内中野式の特徴を示す個体が多い。

後半は、植苗式（17）が米原3遺跡、米原4遺跡より多数出土している。また、円筒土器下層式（15・16）が、米原4遺跡A地区、宮戸4遺跡斜面・町道部分より散発的に出土する。

縄文時代中期

前葉は、米原3遺跡、米原4遺跡B地区で、円筒土器上層式、萩ヶ丘1式（18）が出土している。特に米原3遺跡では萩ヶ丘1式が多く、この時期の主体部であった可能性がある。

中葉は、宮戸4遺跡S地点で萩ヶ丘2式（19）、米原4遺跡B地区で、東北南部に由来する大木8a式相当の破片（20）が出土している。また、天神山式（21・22）が米原4遺跡A地区、宮戸4遺跡斜面・町道部分南側の台地上という比較的狭い範囲より出土する。

後葉は、米原4遺跡B地区で柏木川式期の集落が営まれる。住居跡5軒を中心に、同時期の土坑や焼土、礫集中が検出された。（Ⅷ章第1節で、山中が特定の住居跡に石器製作に関連する遺物が多い点に着目し、集落における役割の相違を指摘している。）柏木川式（23）は、対岸の宮戸4遺跡S地点、斜面部分でも多く出土している。

中期末葉～後期初頭には、米原3遺跡で集落が営まれる。集落の主体だったと推測される平坦部が削平されているが、住居跡2軒などが検出された。H-1は北筒式期、H-2は余市式期の所産で、いずれも石囲い炉を伴う。住居の形態が近似することから、この2軒はほぼ同時期に連続して居住していた可能性が高い。北筒式（24・25）の分布は、米原3遺跡のほか、米原4遺跡に多い。米原4遺跡B地区では、北筒式の出土点数が遺構時期の主体である柏木川式よりも上回っている。宮戸4遺跡ではS地点から少数出土する程度で、斜面部分より北側では出土していない。

米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡では合計98基のTピットが検出された。イモツペ川の旧河道へ下る沢地形を意識して設けられており、配列をなすものも見られる。北側（宮戸3遺跡側）へ近づくほど濃密な分布を示す。宮戸4遺跡のTピットについては、平成13・14年度に中間的な考察を行った（北埋調報168・北埋調報185）。その中で、花粉分析や植物珪酸体分析による古環境復元の結果なども踏まえ、米原4遺跡の柏木川式期の集落が廃絶して開けた土地となった後、米原3遺跡で集落を営んでいた北筒式～余市式期の人々が、より下流域へ来てTピットを構築したのではないかと推論した。今年度、宮戸4遺跡樹林部分で検出されたTピット2基の底部より採取した炭化物を用いて、放射性炭素年代測定（AMS法）を行ったところ、 $3,860 \pm 40$ (y B P)、 $3,900 \pm 40$ (y B P) という値を示した（Ⅶ章第2節参照）。この測定結果は、昨年度考察したTピットの構築年代である中期末葉～後期初頭に概ね当てはまる。これまでにイモツペ川流域で検出されたTピット群の全体像については、Ⅷ章第2節で笠原が形態分類を主眼に論考している。

縄文時代後期

初頭は、米原3遺跡で余市式（26）が多く出土する。しかし、他の遺跡では宮戸4遺跡S地点と斜面部分でわずかに出土する程度で、非常に希薄な分布を示す。

前葉は、米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸4遺跡の広い範囲でタブコブ式（27・28）が出土する。宮戸4遺跡S地点では、土器片囲い炉が1か所検出された。タブコブ式期の土器片囲い炉については、昨年度、



図Ⅷ-3 イモツペ川流域の遺跡群で出土した土器

(●: 米原3遺跡、○: 米原4遺跡、▲: 宮戸3遺跡、△: 宮戸4遺跡)

分布・形態・編年・時期などについて考察した（北埋調報 185）。分布を見ると、宮戸 4 遺跡斜面部分の南西側から S 地点にかけての台地上に特に多い。宮戸 4 遺跡水田部分・斜面部分の低位部分ではほとんど出土していない。遺構と遺物の分布から推測すると、宮戸 4 遺跡 S 地点の南側調査範囲外にタプコプ式期の主体部がある可能性が高い。米原 4 遺跡 B 地区北東側の沢地形内では、当該期に形成されたと見られる焼土群が検出されている。放射性炭素年代測定（AMS 法）では、宮戸 4 遺跡の土器片囲い炉が $3,660 \pm 40$ (y B P)、米原 4 遺跡 B 地区の焼土が $3,520 \pm 40$ (y B P) という数値が得られた。いずれも従来の編年より新しい時期に相当する点が注目される。

縄文時代晩期

米原 3 遺跡、米原 4 遺跡、宮戸 4 遺跡斜面部分で後葉の土器が少数得られている。米原 4 遺跡 B 地区より出土した 2 個体（29・30）は、大洞 C 2 式～大洞 A 式に相当するものである。いずれの遺跡でも出土範囲が狭く、個体数も少ない。

続縄文時代

当該期の遺構は確認されなかった。宮戸 4 遺跡樹林部分の試掘坑より前葉の大狩部式の破片 1 点が出土した。出土地点は発掘調査より除外されたため詳細は不明である。また、米原 3 遺跡で中葉の後北 B 式（31）が少数出土している。

擦文時代

宮戸 4 遺跡 S 地点で楔形列点文、綾杉状刻線文が施された深鉢（32・33）、水田部分で高坏（34）が出土した。いずれも小型の個体で、限定された地点からの出土できわめて少数であることから、遺跡の主体的な遺物ではなく、移動などの際に外部より持ち込まれた可能性が高い。

アイヌ文化期

当該期の遺構・遺物は確認されていない。遺跡群よりも下流域（現在の宮戸小学校付近）に大きなコタンがあったとの記録が残っている。

まとめ

イモッペ川流域の遺跡群の特徴は、縄文時代早期から擦文時代までの長い期間にわたり、消長はあるものの、人間の活動の痕跡が残されていることである。

縄文時代早・前期の集落は調査範囲内では確認されなかったが、土器の分布から推し量ると、南西外側の段丘上に主体部が存在する可能性がある。この時期はイモッペ川流域の広い範囲で、植物食料の採集を中心とした生業活動が行われたと推測される。遺構・遺物の分布の変化は、人々が生業活動を行う範囲を時期によって重点を移してきたことに起因すると考えられる。

縄文時代中・後期はイモッペ川を臨む段丘上の縁辺部に集落が形成される。早・前期と比較して、土器の分布が時期によって明確に濃淡が分かれる。この特徴が顕著なのは、中期末葉～後期初頭の北筒式・余市式の時期である。米原 3 遺跡に主体部があり、Tピットを仕掛けるためにやや離れた下流へ進出するが、活動の痕跡は米原 4 遺跡、宮戸 4 遺跡 S 地点までである。エゾシカ猟を効果的に進めるために、居住域と狩猟域とを区分していたものであろう。

晩期～続縄文時代以降は、花岡遺跡、鵠川盛土墳墓群などに見られるように、鵠川の本流に近い低位の段丘面あるいは河口付近へ、居住域および活動の主体が移っていったと考えられる。

（芝田）